

2019 私の劇評

あなたにとって芝居とは、
そして、旭川市民劇場とは？
一年を通して、見えてきた
こと、感じたことを投稿い
ただきました。

「演劇との出会いが生きる力に」

演劇との出会いが、これほど生
き方に影響を及ぼすとは思って
ませんでした。歳を重ねるほどそう感
じます。そこにあるのは市民劇場
の存在の大きさです。事務所に集
い、演劇について、ときには人生、
社会について、ある人は熱く、あ
る人はとつとつと話す光景は、今
失われつつある人と人が向き合
い、顔を見ながら話すことの大切
さを教えてくれます。この姿勢こ
そが市民劇場が長い歴史を刻んで
こられた原動力ではないかと思
います。さらに今年は自分を敢えて
一歩厳しい環境に追い込みまし

た。もっと演劇・市民劇場を知り
たいという思いです。一歩踏み込
むことで観える風景が少し変わ
りました。あらためて演劇・市民劇
場を奥の深さを知ることになりま
した。私は社会的な活動にも積極
的に関わっています。それは演劇
も社会・政治と無縁のところにあ
るのではなく、私の中では有機的
に結びつき、間違いなく相乗効果
を生み出しています。でも演劇・
市民劇場の存在感が増しに大き
くなっています。年6本観る事
私にとっては絶対譲れない事
です。そのためにはあらゆる手段を
駆使します。心をより豊かなもの
にしたい。その思いを叶えてくれ
るのは、今の私には演劇そしてそ
れを通じた人たちとの話し合いで
す。私の今年の一本は「八月に乾
杯！」です。熟練した二人の台詞
劇は圧巻でした。戦争の体験が二
人の心の奥底にあり、なかなか素
直になれない。でも時間がそれを
徐々にとかしていく。「生きてい
てよかった」「あなたってかたに、

めぐり逢うための、人生だったの
かしら、あたしの人生って、もし
かしたら」。これはお芝居だけの
話ではないと思うのです。人生と
は筋書きのないドラマとも言われ
ています。時間も、場所も超えた
普遍性を感じました。どんな人生
が待ち受けているかわからないけ
れど、自分の信じた道を歩んで生
きたいと思います。原則を大事に
しながらも、自己本位に陥らない
ように気をつけて。

(六〇代 男性)

「2019 私の劇評」

再演の例会が3本と多かったの
ですが、30年以上経っており、三
度目の三婆以外はあまり記憶に
残っておりませんでした。青年期
に観て楽しんだ芝居が高齢者に
なつて身につまされるものを感じ
られ、演劇は観る人の置かれてい
る状況でどうも違って受け止める
ことになるのかと、身をもって知
りました。今年の6本の例会では

「これだ！」という傑出した作品はありませんでした。この作品の世界は気持ち良くて余韻に浸れた」と感じたのが「もやしの唄」でした。もやしが奏でる詩的な音で別世界に誘われました。舞台の結末はもの足りなかったのですが、登場人物の生き方の柱や社会状況への立ち向かいがしっかり見られると、時代を超えた作品世界が広がったのではと残念に思いました。
(六〇代 男性)

『2019年に『泣かされたお芝居』』

70歳になり涙もろくなった私が、泣かされたお芝居のベスト3はと思いつつパンフレットなどを見ながら三婆・O.G.・もやしの唄・八月に乾杯・柳橋物語・集金旅行と思いましたが、号泣したお芝居はなかった。少しほろつとしたのは八月に乾杯でのお墓でのシーン、台本で泣けたのは、もやしの唄と意外に2019年は

泣くことがなかった。しかし大笑いすることもなかった。今年は、私の選んでいたお芝居がほとんどだったので少し何か足りなく残念な気がします。忘れることが多くなってきた私でも姉と思いつけながら話ができ、1年を振り返る企画いいですね。2020年に期待しよう。
(七〇代 女性)

『私は生きていく』

ほうき草の風

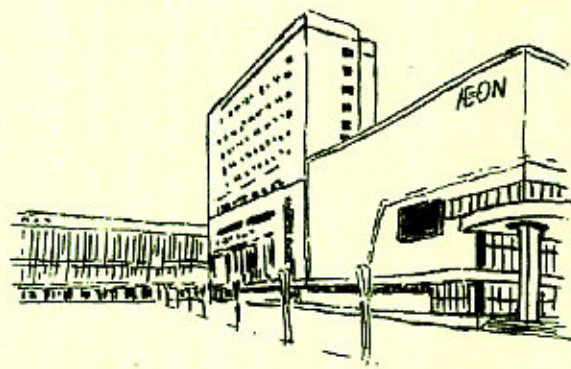
2ヶ月に1度、私はそこに居る。私が生きている証しとしてである。期待しながら、目の前に広がる世界に、身も心も寄せて行く。それでも、時には現実の世界に疲れ、暗闇にまぎれて、うたた寝をしたりする。時には登場人物に成り替りもする。そう、そこは私にとって、これからも生きて行くエネルギーを貰える場所だから、とても愛しい。2019年の中で私は、4月例会ミュージカル「O.G.」が楽しかった。ミュージカ

ルは苦手なのに、引き寄せられる私がいた。私も踊りたい！歌いたい！と思った。だから、市民劇場へ行くのが止められない。まだ足は向いている。生きて行こうとする私がいる。2020年も、楽しみたい。
(七〇代 女性)

『学びの場！市民劇場』

もやしを見ると6月例会運営を！もやしを洗っていると芝居のセールスポイントの話が！もやしを食べるとあの舞台が蘇る。年一回運営担当としての活動の中で得るものはたくさんあるが、「もやしの唄」担当は今まで味わったことのないもやしの可愛いらしさを通して、優しさ、温かさが浮かんでくる。幸せな余韻が続いている。観劇前に様々な人とのコミュニケーションは、一層舞台をふくらませることも学んだ例会であった。市民劇場は私にとって、復習・予習の場である。原作者の作品を読むことを課している。2019

年は、有吉佐和子・山本周五郎と、町の図書館の裏側の書棚から捜してもらった色あせた本、しかし今もなお毅然として中味に、私の若かりし頃の読書感を重ねる。岩崎加根子・檜山文枝のりんとした演技も心に残る。今村文美さんの可憐なおせんが忘れられない。今私の机の上に、井伏鱒二、太宰治らの分厚い『日本現代文学全集』がのっけている。更に井上ひさしも重ねられるであろう。2020年も忙しい……
(七〇代 女性)



「2019私の劇評」

芝居を観るか、役者を観るかの例会で今年も楽しく。文化座と、前進座の、新旧役者に興味を持ちながら役者を観る一年に成ってしまつた。それでも、4月の例会は素晴らしかった。一番かな。投稿女性が、山本周五郎の世界は素晴らしいと、芝居を観続けたいと有つたが、小生も同感で、また、今村文美さんの観たいものです。追伸、全体的に舞台演出が良かった。相変わらず客席マナーが悪い。

(男性)

「2019私の劇評」

この原稿の依頼を受けた時、氣楽に受けた事いざ書く事になった時ちよつと後悔しました。振り返ってみると、三婆は何回か上演されてはいますが、私は初めて見ます。本妻と妾が同居する、小説の中でしか存在しない話でしたが、人は一人きりでは生きられない、年を

重ねる時、だれかと暮す時生きがいは何か、考えてしまつた。「O.G.」は担当例会でいかに例会を成功させるか必死でしたが、会員を増やす事が出来ず、それが心残りです。「もやしの唄」や「八月に乾杯」「柳橋物語」「集金旅行」などどれも私の中ではすんなり受け込めて今年はどれも良かったと思います。私にとってはお芝居は、心の癒しです。仕事で疲れた心の栄養ドリンクです。いつまでもお芝居を見られる体力、財力、そして、仲間を増やす事に、頑張りた

(六〇代)

「心豊かに人生を送るための演劇」

入会して3年、「もやしの唄」は急な所用のため初めて見逃してしまひ残念でしたが、残り5本は観ることが出来ました。私事です。が、年初の冬より10カ月程、体調不良で元気もなかったのですが、ようやく、9月下旬頃より心身ともに回復途中にあります。私も63

歳、健康に人一倍、気を使わなければならぬ年代に入ってきました。さて、私のベストワンは、12月例会の民藝「集金旅行」です。と云うのも、主役の榎山文枝さんは、私にとって、「永遠のおはんはん」(小4テレビ放送時)であり、永遠のマドンナだからです。年を重ねた今も、彼女は可愛らしくてチャーミング!!彼女の舞台を観ただけで、会費を1年払い続けた甲斐がありました。次点は、「八月に乾杯!」です。これもかねてより舞台で観たかった岩崎加根子さんと小笠原良知さんとの、人生の黄昏のような大人のラブストーリーを味わい深い作品でした。他の3本も、「三婆」の老女、老男のバトルも、おひとりさま人生の私にとつても身につまされましたし、「O.G.」も、旺さん、阿知波さんのコンビでの歌と芝居のやりとりが圧巻で、2人ミュージカルを楽しめましたし、「柳橋物語」は改めて前進座の座員の芝居の底力を感じました。たまに、江戸人

情劇も良いものだと思いました。2020年も、6本、楽しみなラインナップが並び観る日に体調を崩さないよう、気をつけ、全て観られることを祈念して、市民劇場がいつまでも続きますよう、心よりお祈り申し上げます。

(六〇代 男性)

「例会作品の感想と現在気になっていること」

例会作品の感想。2月例会「三婆」。「迫りくる老い」という身近なテーマで、いろいろと考えさせられた。笑いもあつたが、今ひとつインパクトに欠けた。4月例会「O.G.」。あの前説はいただけない。芝居というよりはバラエティー・ショーを観ているような印象。内容的にもちよつと薄っぺらな感じがした。6月例会「もやしの唄」。自分が好きな・観たいと思っていた芝居。何か大きな事件があるわけがなく淡々と進んでゆく舞台だが、何とも言えない愛し

さを感じた。誠実に生きる人たちに好感。お見合いのエピソードも抜群！脚本が良く出来ていた。9月例会「8月に乾杯！」。岩崎さん、小笠原さんお二人の円熟した演技、ゆったりした間の取り方、次はどんな展開になるのだろうかというワクワク感、なかなか観ることのできない素晴らしい舞台だったと思う。二人が踊る場面は、きつと二人にとって一生に一度の特別な一日だったに違いない。「人生の中で何かを始めることに遅すぎることはない」という肯定的なテーマを強く感じた。11月例会「柳橋物語」。おせんに次々と襲いかかる苦難、救いのない生活。作者の描き方に容赦はない。救いがあるとするれば、幸太の彼女に対する思いを支えに、子と共にこれから生き抜いていくことを決心したとか。作者の、厳しい世間を描きながらも、「人が人を思うということ。ひたむきに一生懸命生きていけば、誰かが手を差し伸べてくれる」。そんな暖かな眼差しを感じ

じることができた。今村文美さんの迫真の演技、他の出演者も皆達者。舞台に集中して観ることができた。ただ、火災のシーンの描き方はどうなのか？別の描き方もあったのではないか。12月例会「集金旅行」。樫山さんと西川さん、可笑しくて奇妙な二人旅を好演していたと思う。樫山さんのはまり役か。次第に心を寄せ合う二人、樫山さんの「友情6割、あとの4割はヒミツ！」という台詞は可笑しかった。現在気になっている事。それは、2019年10月開催された「サークル代表者会議」の議題になった問題。平均すると毎年50名ずつ会員数を減らしており、このまま単純に計算すると2021年には財政が赤字になってしまおうということ。毎例会担当サークルが一生懸命頑張って「声かけ」し新入会を迎えても、入会者数が退会者数に追いつかない現状にとても心配している。では、どうすればいいのか？それは、「できるだけ多くの会員が、周りのできるだ

け多くの人に「声かけ」を続けていく」ことが最も有効な方法だと思ふ。このままでは、「声かけ」を続けていくのにも限界がある。代表者だけではなく、サークル会員も積極的に「声かけ」をしていくのでなければ、現状はなかなか変わっていかないと思う。私のサークルでは、例会担当の時と全サークル（全会員）で取り組む2月例会の時に、座席シール配付の時、会員動態の状況と「声かけ」依頼を伝える文章と一緒に、チラシと年間ラインナップを同封した「声かけ封筒」を手渡し、または郵送でサークル会員に渡している。（なかなか結果には結びつかないが…）各サークルでいろいろなやり方があると思う。運営担当サークルの会議の時など、ぜひ参加者みんなで話し合ってみたいなと思う。とにかく、たくさんの方が「声かけ」をしたその先に新入会が増えるという結果があるのだと思う。2020年は、優れた作品が続くということもあり、

まさに踏ん張り時だと思ふ。今年、以上のことを心配しながらも、自分なりに「あと一歩だけ、前に進む」ということを頭の片隅におきながら一年を過ごしたいと思ふ。
（六〇代 男性）

